

収蔵遺物保存活用化事業

一 豎野（冷水）窯跡の再整理を中心に

調査課第一調査係

Work for fair preservation and practical use of stored artifacts

The first section of the research department

要旨

収蔵遺物保存活用化事業において、薩摩焼の藩窯である豎野(冷水)窯跡の再整理を行った。その結果、型打ち成形で製作された、デザイン性に富んだ高品質の皿や鉢が製作されていることがわかった。これらの型打ち製品は、鹿児島(鶴丸)城本丸跡や二之丸跡では発見されず、江戸の薩摩藩上屋敷跡でしか確認されておらず、幕府の有力な家臣や諸大名、または将軍家等との外交行事(婚礼や特別な催事等)に用いられた器と考えることができ、重要な宴席等で使用されることを目的に製作された最高級品の「白薩摩」であったといえる。

キーワード 収蔵遺物保存活用化事業 薩摩焼 豎野(冷水)窯跡 型打ち製品 薩摩藩上屋敷跡 重要な宴席 最高級品の「白薩摩」

1 はじめに

収蔵遺物保存活用化事業は重点分野雇用創造事業により導入したもので、平成25年1月から平成25年10月まで実施した。劣化した遺物の復元や時間のない中で整理された遺物の再整理を行い、切り取ったままの遺構や剥ぎ取り資料などをパネル化し、活用に供することを目的とした事業である。

再整理では、36年前の1978年に刊行された鹿児島市冷水町にある豎野(冷水)窯跡の資料を最初に扱った。薩摩焼の中で活用できる白薩摩の資料が少なかったことと、ここ十数年のうちで鹿児島における考古学分野で最も研究が進んだのが薩摩焼の研究であり、県内外から豎野(冷水)窯跡の資料が注目されていたからである。豎野(冷水)窯跡出土品の再整理が進むにつれて後述するような特異性が明らかとなったことから、鹿児島(鶴丸)城跡の出土品と比較するために、鹿児島(鶴丸)城本丸跡と鹿児島(鶴丸)城二之丸跡の出土品再整理も手掛けることとなった。この作業を行った結果、新たな完形品が加わるとともに、本丸跡と二之丸跡の資料が接合した例も少なからずあったことなど、多くの成果が得られた。これらの資料の一部は、「上野原縄文の森」の第37回企画展「新発見!かごしまの遺跡2013」で展示を行った。

次に遺構や土層であるが、新たに剥取りを行ってパネル化したものは、志布志市下原遺跡における大正3(1914)年に桜島噴出の火山灰が堆積した大型道路跡と、大崎町荒園遺跡におけるアカホヤ火山灰噴火時に起こっ

た大地震による噴砂跡である。これらは、「上野原縄文の森」の第36回企画展「～桜島大正噴火100周年記念 巨大噴火と共に生きた人々」で展示を行った。

また、これまで剥ぎ取ったままで収蔵されていた資料や劣化した遺構切り取りの修復を行った。それには、市来貝塚貝層断面、柘原貝塚貝層断面、榎崎B遺跡の旧石器時代礫群、桐木遺跡の旧石器時代礫群、前原和田遺跡の旧石器時代礫群などがあり、エントランスでの展示をおこなった。

以上のように、本事業によって多くの資料を活用できるようになり、さらに学術的な成果も得ることができた。特に、豎野(冷水)窯跡の資料については新たな知見も得られたので、以下に詳しく紹介することとする。

(文責 東 和幸)



第1図 豎野(冷水)窯跡位置図

2 豎野（冷水）窯跡出土資料の再整理について

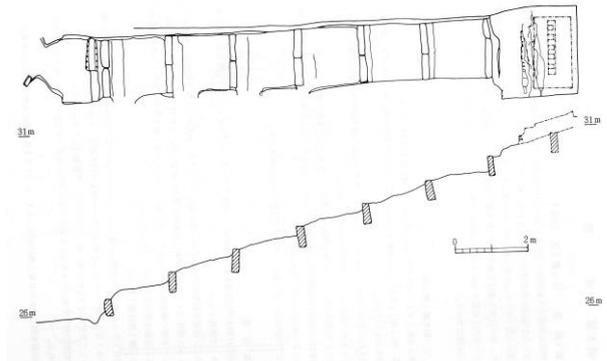
(1) はじめに

近年、薩摩焼諸窯の発掘調査が増加し、薩摩焼の考古学的成果はめざましく進展してきている。冷水窯については調査後、報告書は刊行されているが、膨大な量の出土遺物の中には諸制約により未整理な出土品が多く、その様相は十分に解明されているとはいえない。したがって、今回の再整理により、薩摩焼諸窯に強い影響を与えた藩窯・冷水窯跡の出土遺物について、今日的な視線で再整理を行うことは、薩摩焼の研究上絶好の機会である。

本稿では、再整理により明らかになった成果の中から特に注目すべきものについて述べるとともに、最新の薩摩焼研究からみえてきた冷水窯の新たな一面について、若干の考察を加えながら述べておきたい。

(2) 冷水窯跡の概要

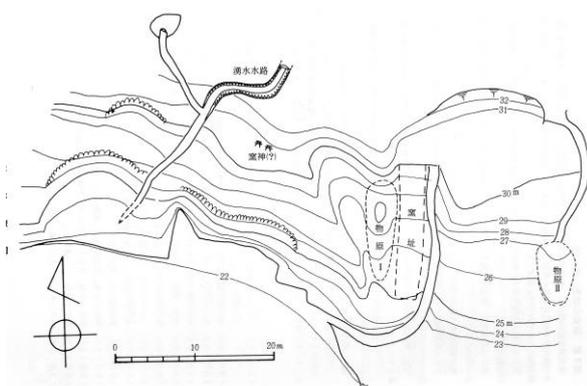
冷水窯跡は、鹿児島市冷水町（第1図）市街地を取り囲むように形成されたシラス台地の小谷の末端に所在した江戸時代の薩摩焼古窯の一つである。昭和53年（1978）に社団法人鹿児島共済会南風病院女子寮建設に伴い発掘調査が行われ、それまでは美術史上で語ることの多かった薩摩焼を、考古学上の基礎資料として捉える契機となった遺跡である。



第3図 冷水窯 実測図



物原 I 断面



第2図 豎野（冷水）窯跡周辺図



窯跡全景

豎野系窯場は、薩摩藩の藩窯で、一般的に「白薩摩」と呼ばれる白色陶胎の陶器を中心に、藩主やその一族などの上級武士層が使用する茶道具や日用品を製作した窯場である。

冷水窯は、島津義弘時代の豎野系窯場である宇都窯、御里窯（ともに始良市）を経て、義弘の跡を継いだ家久が鹿児島市の鶴丸城に移城した際、1620年（元和6）頃に開窯されたとされる。（田沢金吾・小山富士夫 1941）

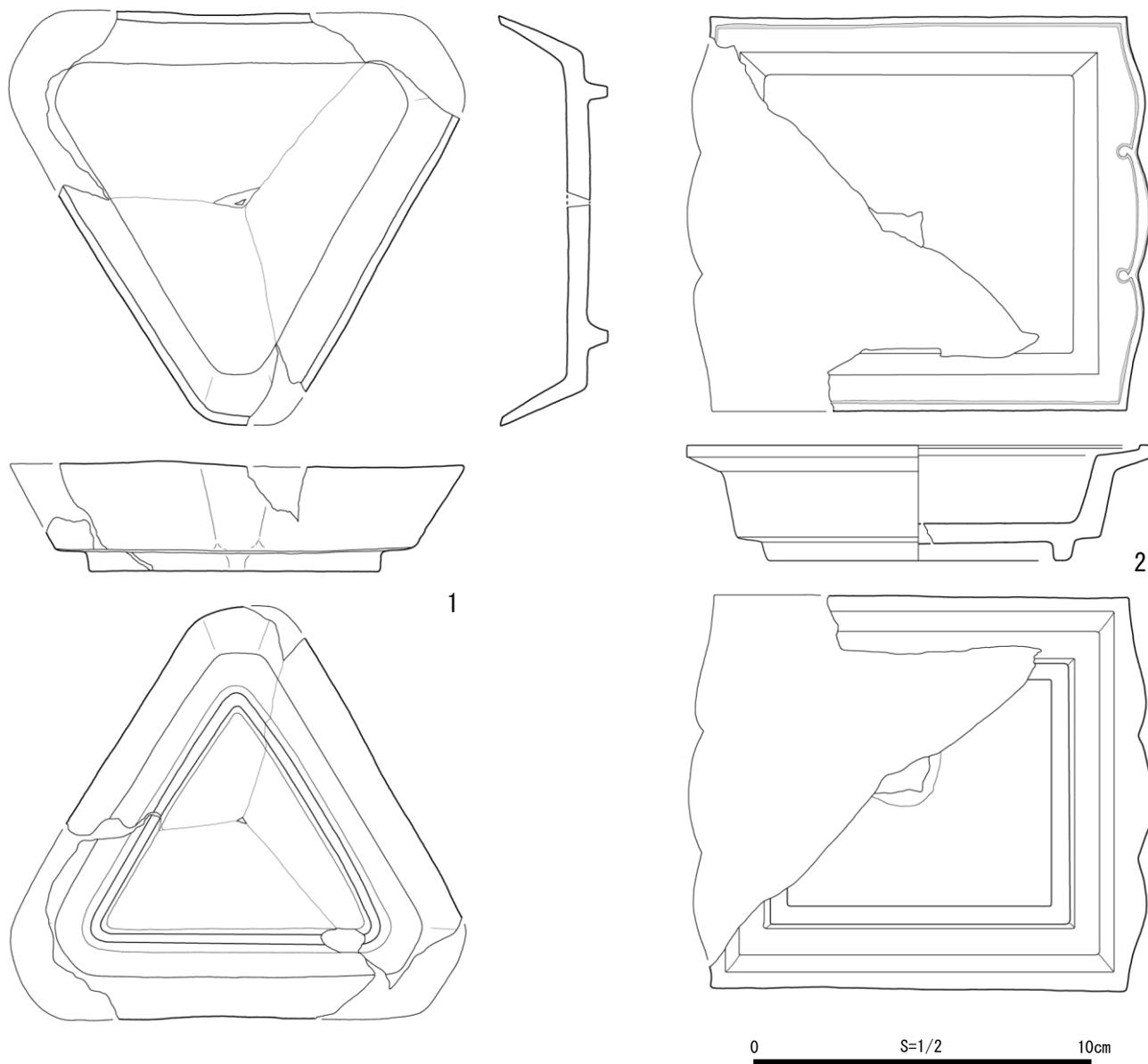
発掘調査では、窯跡1基と物原2か所が検出された（第2・3図）。窯は平面全長14.48mを測る連房式登り窯で、胴木間と7室の焼成室からなる。南向きの斜面に築かれており、標高は胴木間で約25m、窯尻で約30mを測る。物原からは大量の陶器片や窯道具が出土した。

(3) 再整理により明らかになった冷水窯の製品

出土品の再分類・接合の結果、冷水窯の製品は、茶入や茶碗等の茶道具、碗、皿、土瓶、仏具等が主であることがわかったが、その中でも特に注目される製品は、型打ち成形により製作された皿や鉢などであった。

これらは、丁寧な作りでデザイン性の高い製品である。胎土は、精緻で鉄微粒子の混ざらない緻密な純白の白土を使用している。型打ち成形により繊細な文様を表現するには、このような上質の白土を使用する必要があったであろう。

文様は繊細な陽刻の唐草文を施したものや、逆ハート型の透かし彫りなどもあるが、色絵などの上絵付けを施したものは見られない。



第4図 型打ち製品実測図(1)

形状は三角形や四角形，六角形，八角形，さらには鮑や月日貝，蛤，蕪，ミョウガや瓜を象ったものも見られる。高台も器の形状に合わせ三角形や四角形，菱形等を呈し，変形の高台も見られる。その他，高さ1 cm程度の円柱状の小さい足が3か所もしくは4か所付けられるものもある。

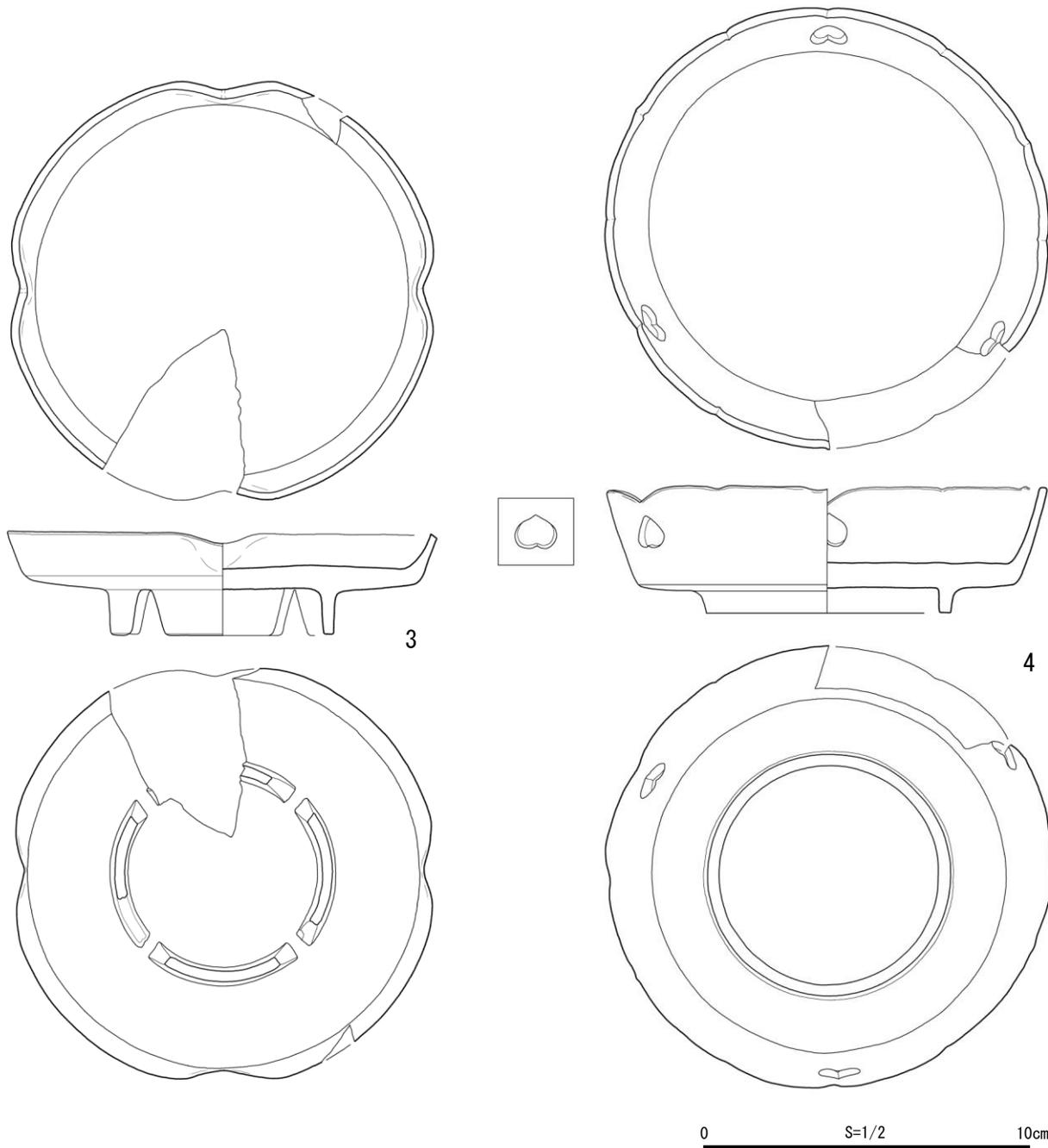
また，資料の中には，製品の底面を穿孔するものが観察できる。これは，焼成不良等で製品とならないと判断されたものを，その場で外底面から敲打し，確実に破壊してから廃棄したものと考えられる。以下，特徴的な型打ち製品（第4～7図，1～24）について説明する。（実測図は1～9のみである。10～24は，本報告では実測図

の掲載はできなかったが，今後図化していく予定の資料である。今回は写真を掲載する。）

1は正三角形の特異な形状をした皿で，角は尖らず丸く作られる。文様を施さないシンプルなデザインである。底部には焼成後，外側から穿たれた小孔と三方向に走るヒビが見られる。

2は短い折縁の端部に，陽刻の縁取り線がつく皿で，折縁の一对面は波状に形取る。底部には焼成後，内側から穿たれた小孔が見られる。

3はロクロ成形後，型押しにより口縁部を花卉状にする。高台は割高台をなす。



第5図 型打ち製品実測図(2)

4はロクロ成形後、型押しにより口縁部を花卉状に作り、3か所逆ハート型の透かし彫りが施された皿である。

5は逆ハート型の透かし彫りが施された鉢である。高台は円形で、体部は四角に変形させ、口縁部を大きく4か所弧状に挟り取る。胎土は白色を呈し、緻密で鉄分等の混ざりは見られない。透明釉は明度が高く、細かい貫入が入る。

6は内面に段を持ち、下段部に型打ちによる陽刻文が見られる。角張ったシャープなつくりで、他の製品に比べて器壁は厚く、重量感がある。報告書掲載番号121の資料と同じタイプのものであるが、再実測を行った。2と同様胎土は緻密で不純物を含まない。素焼き段階で廃棄されたものである。

7は円形の皿を隅丸方形に変形させ、円形の端部を対で2か所、内側に折り曲げて耳状のアクセントを作り、残りの2か所は鋭利な刃物等で平行に切り落として対比させた意匠を持つ。底部には焼成後、外側から穿たれた小孔が見られる。

8は体部が内傾する深みのある器形で、高台を持たず小さな4足が付けられる。底部には焼成後、外側から穿たれた小孔が見られる。

9は木の葉形の変形皿である。内面に葉脈状の文様も見られる。高台は形状に合わせ楕円形を呈する。

10は瓜を象った小皿である。底面には小さな円柱状の足が3か所付くが一部は欠損している。

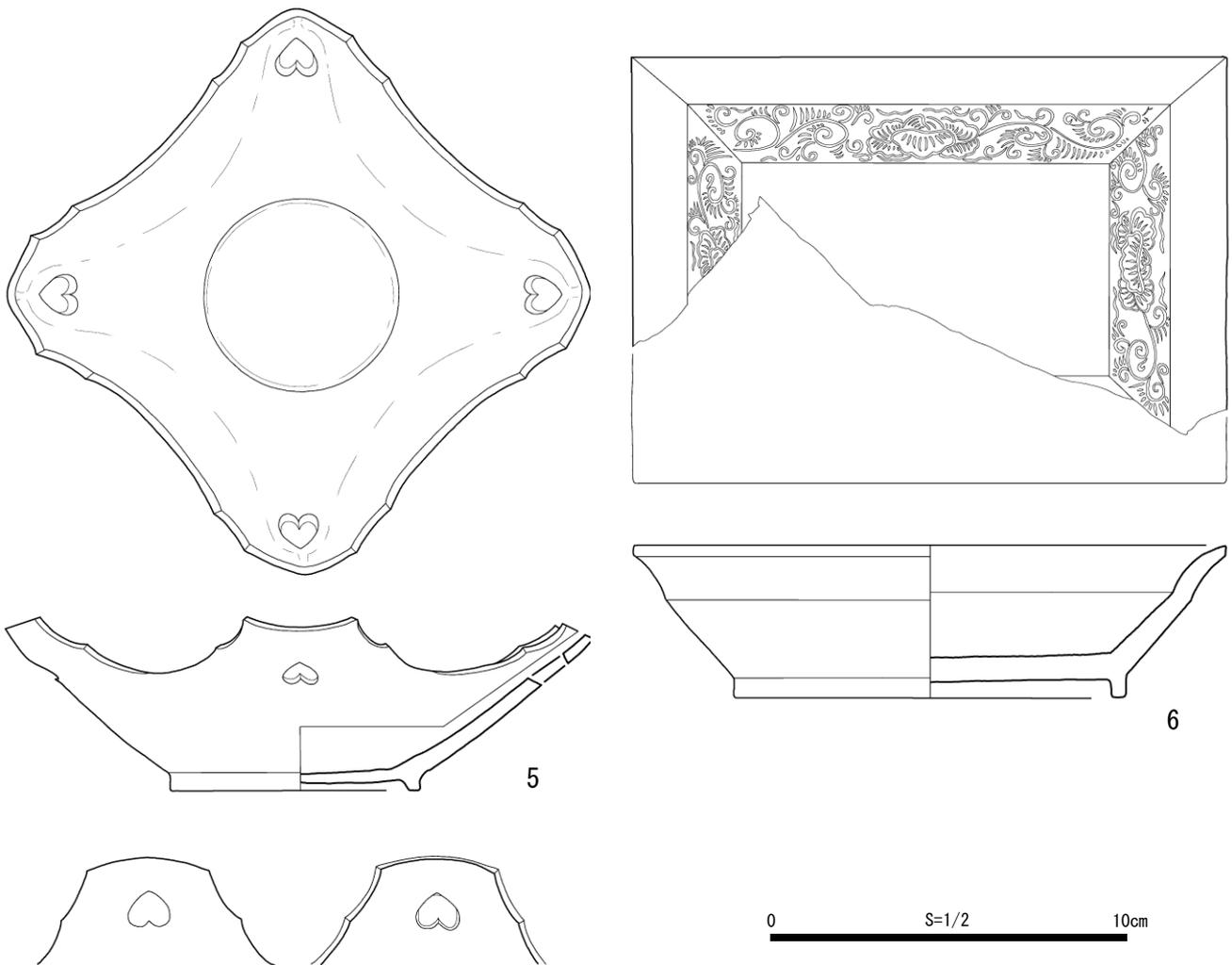
11はミョウガを象った小皿である。高台は皿の形状に合わせ変形高台を成す。

12は長方形の形状を呈する薄手の皿である。短い折縁の端部は、型押しにより縁取りのラインがつけられ、四隅の頂点部は内側へ入る。

13は折縁の先端が花卉状をなし、上面に型打ちの陽刻文見られる。腰部は丸く作られている。

14は体部は菱形で、口縁を折縁に広げ花卉状に成形する。上面には型打ちによる唐草文の陽刻が見られる。

15は桔梗形の薄手の小皿である。高台も花卉形に作る。



第6図 型打ち製品実測図(3)

16は折縁の端部には陽刻の縁取線がつく。他に装飾はなくシンプルなデザインである。

17は体部が円形で、折縁部を四角形に作る。折縁には陽刻の唐草文が入り四隅の頂部に透かし掘りを施す。掲載した2点は別個体である。

18は燕を象った小皿である。底面には小さな円柱状の足が3か所付くが一部は欠損している。

19は直方体の箱物で、長側面には陽刻による花文が施され、短側面にはその花文の上から型打ちされた蝶が貼り付けられる。

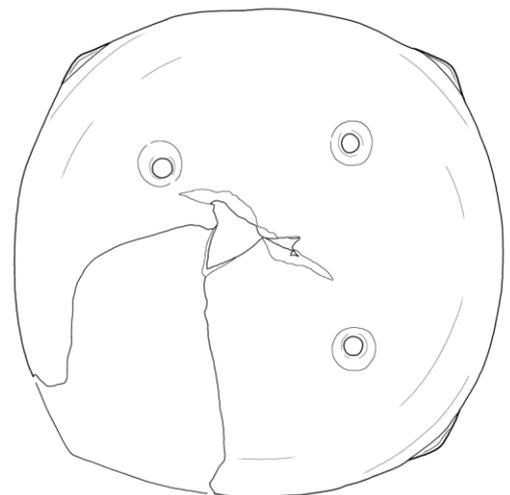
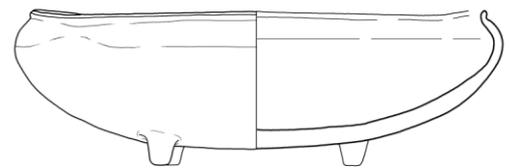
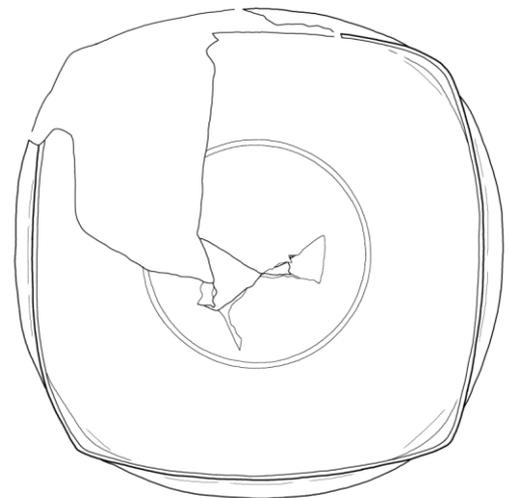
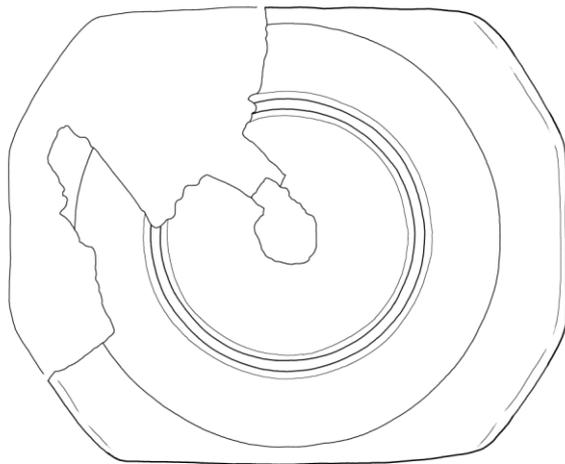
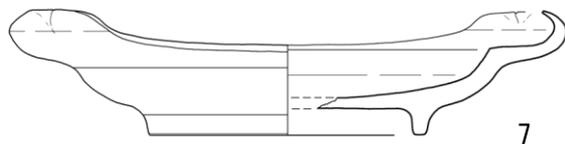
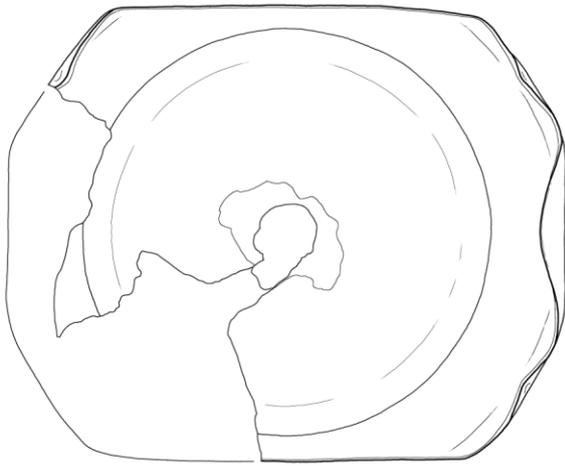
20は月日貝を象った皿である。写真には本物の月日貝も対比のため掲載したが、大きさや細部まで詳細に象っている。3足が付く。

21は鮑を象った皿である。掲載した2点は別個体である。外側には角状の突起も作られており、細部まで忠実に表現されている。突起の間とその反対側に3足が付く。

22は蛤を象った皿の一部で、蝶番部分もリアルに表現しており、裏面の写真は掲載していないが、3足と思われる。

23は2枚の羽を上下に組み合わせたような形を象ったデザインである。

24は酒器である。報告書図版14(p.86)で写真のみ掲載されていたが、今回図化を行った。胎土は灰褐色を呈し、緻密であるが、素焼き段階で破棄された資料であるため、釉調等は不明である。底面を除き全面に型打ちによる繊細な文様が施される。



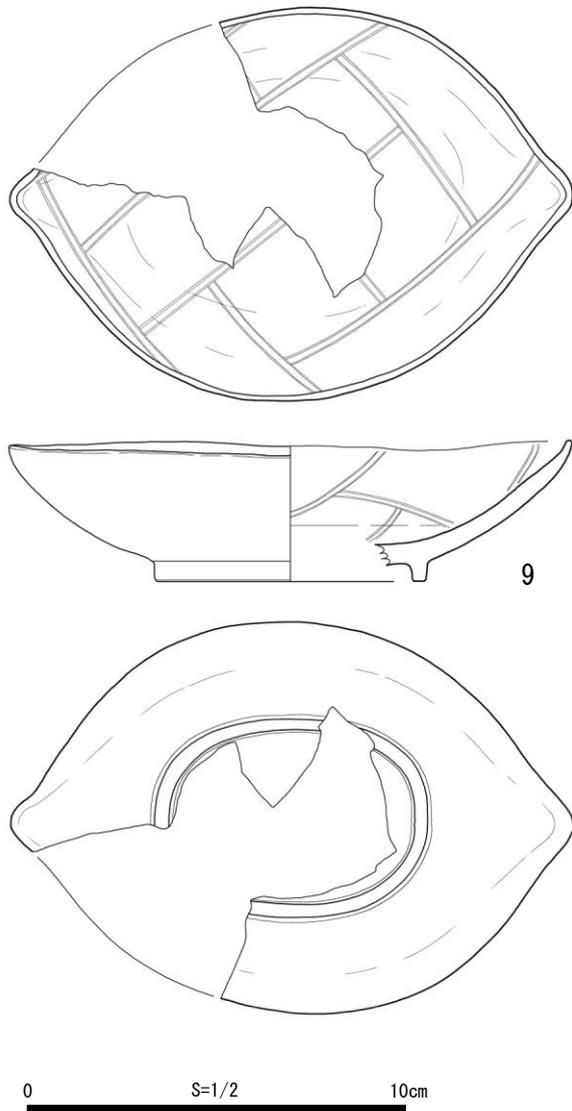
0 S=1/2 10cm

第7図 型打ち製品実測図(4)

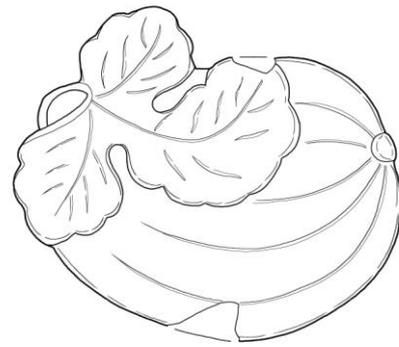
(4) 型打ち製品についての若干の考察

これらの出土品は、型打ち成形にありがちな、陽刻や印刻文の不鮮明な輪郭や鈍い表現性を全く感じさせない高品質の製品である。細部まで丁寧な製作意識が見て取れ、洗練されたデザインは、芸術的な領域を示す資料ともいえよう。このような高品質で意匠性の高い製品は、何を目的に、どのように利用されるために作られたのであろうか。

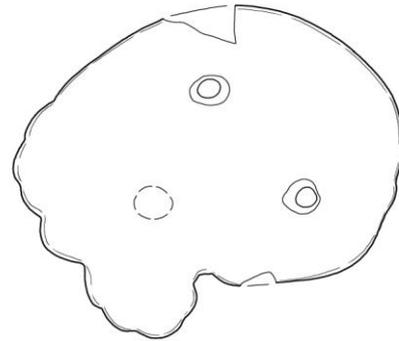
県立埋蔵文化財センターでは、冷水窯跡出土品の再整理を行うとともに、鹿児島（鶴丸）城の二之丸跡と本丸跡の出土遺物の再整理も行ってきた。二之丸と本丸は、島津氏の本城であり、当然のことながら豎野系窯場で焼かれた白薩摩や宋胡録写し、三島手等の上質の製品が大量に出土しているが、これらの出土品の中には、型打ち製品はわずかに見られるものの、これまでに紹介した型打ち製品については確認されなかった。



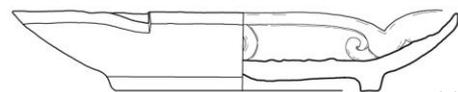
9



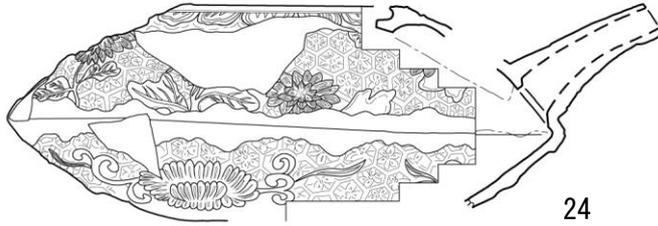
10



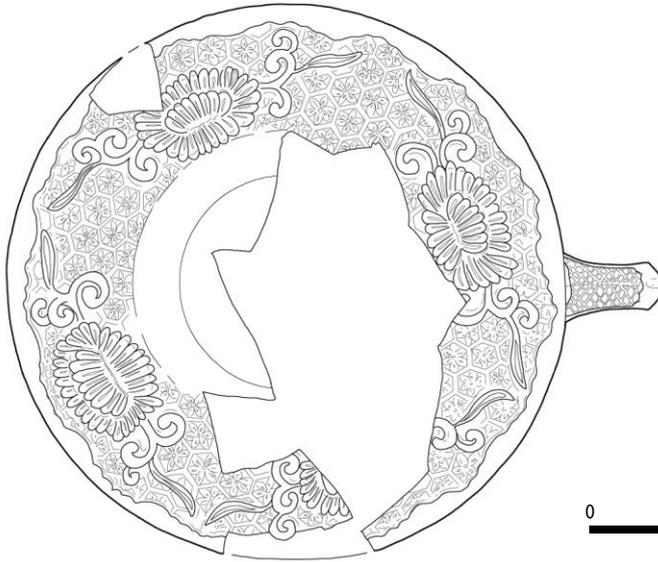
11



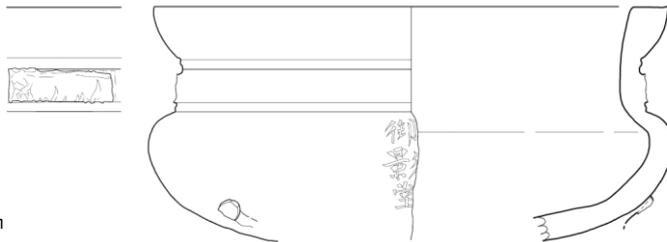
第8図 型打ち製品実測図(5)



24



0 24:S=1/2 10cm



0 25:S=1/3 10cm

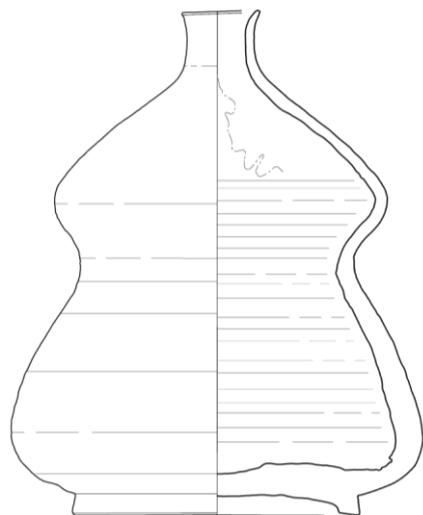
25

第9図 型打ち製品実測図(6)

鹿児島（鶴丸）城跡のこのような出土状況は、島津氏や一部の上級武士層の調度品として定義付けられてきた「白薩摩」と、冷水窯跡の「型打ちの製品」が同じ用途の製品ではないことを示唆するものである。

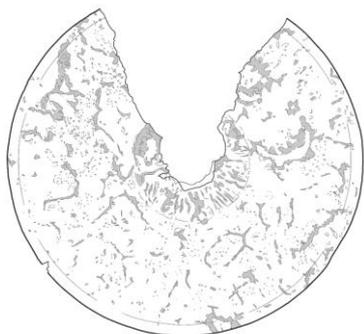
そのことを裏付ける資料として、江戸の薩摩藩島津家屋敷跡第2遺跡出土の薩摩焼が注目される。この遺跡は東京都港区芝3丁目に所在した薩摩藩の上屋敷とされる藩邸跡である。（以下、「薩摩藩上屋敷跡」とする。）報告書が刊行されていないため詳細は不明であるが、毎田佳奈子氏は、この遺跡検出のB区2号遺構（大型土坑）の中から出土した三島手の碗と、E区20号b遺構（大型方形土坑）の中から出土したロクロ成形後型打ち成形の鉢について、冷水窯跡出土遺物との類似性を指摘し、冷水窯の製品が江戸の薩摩藩上屋敷に持ち込まれている可能性を指摘している。（毎田 2007）

筆者はこの指摘を基に、今回の再整理により明らかとなった型打ち製品について、薩摩藩上屋敷跡E区20号b遺構内から出土した白薩摩の皿と比較・検討を試みた。その結果、少なくとも3点（第8図10・11、写真12）が、

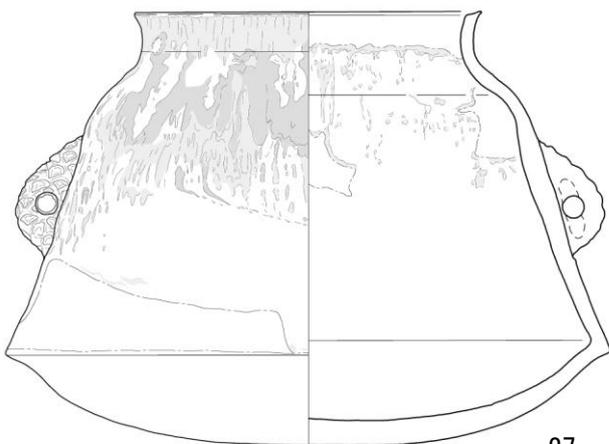


0 28:S=1/3 10cm

28



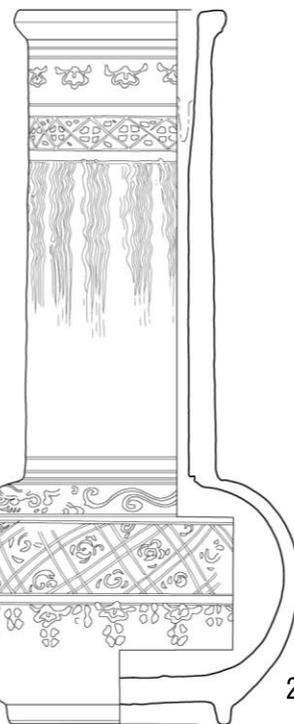
26



27

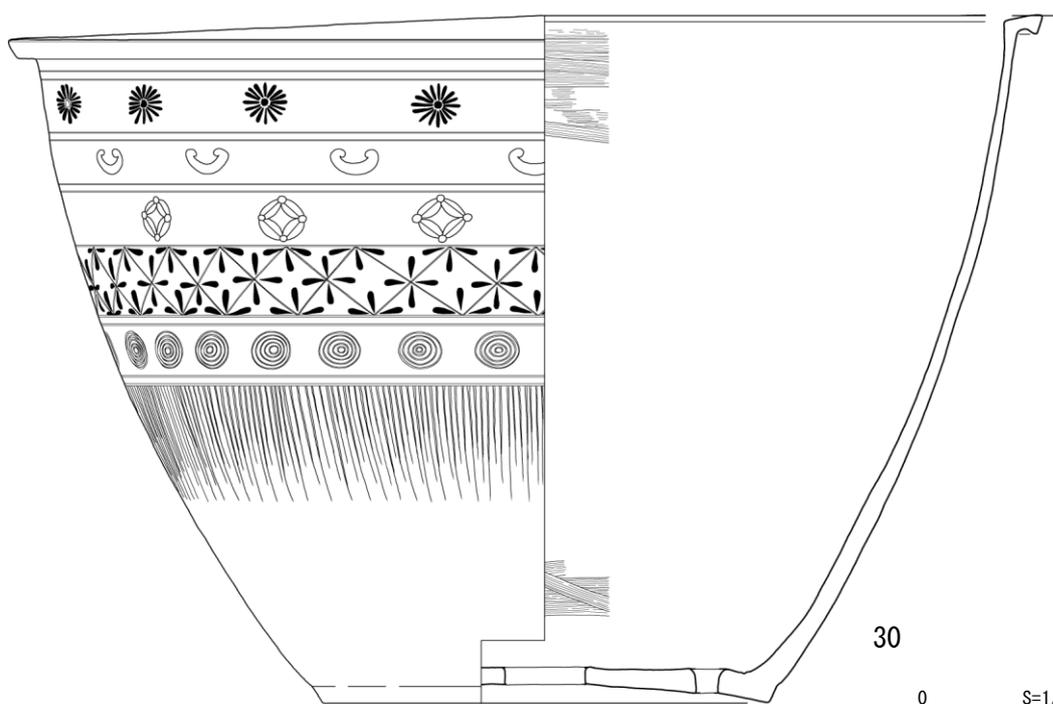
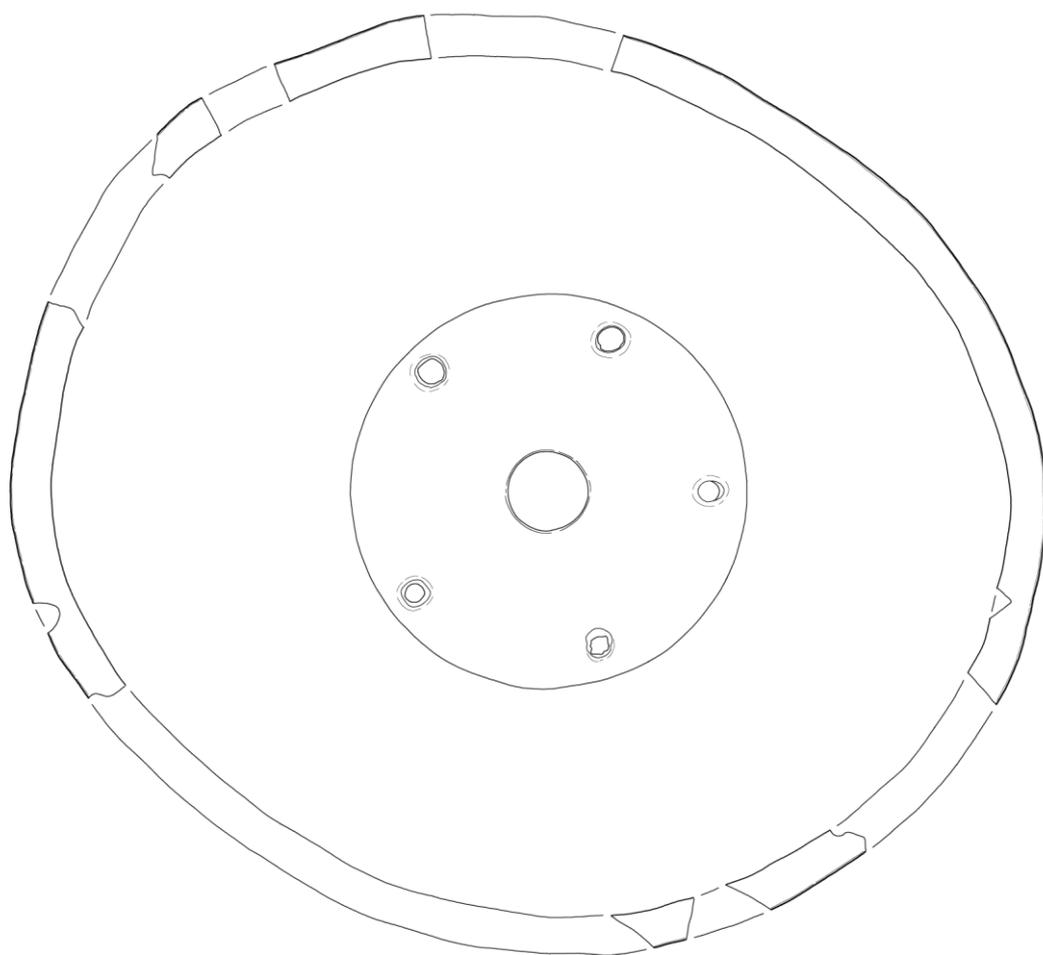
0 26, 27:S=1/3 10cm

0 29:S=1/2 10cm



29

第10図 豎野（冷水）窯跡・鹿児島（鶴丸）城跡出土遺物実測図



0 S=1/6 20cm

第 11 図 鹿兒島（鶴丸）城跡出土遺物実測図

薩摩藩上屋敷跡出土の資料（毎田 2007, p.130 68～70 及び p136 写真 80）と法量，デザイン等極似していることが判明した。冷水窯で生産された型打ち製品の一部が，確実に江戸の薩摩藩上屋敷にもたらされていたことを確認したのである。

また，冷水窯跡出土の型打ち製品は，現在のところ，鹿児島（鶴丸）城本丸跡や二之丸跡からはほとんど出土していない。これらのことから，これらの製品を使用する対象は，薩摩藩内における藩主や上級武士層ではなく，江戸の將軍家や有力な家臣，諸大名などであり，薩摩藩上屋敷で開かれる外交行事（特別な接待や婚礼等）の宴席において使用された器と考えることができる。

(5) その他の資料について

再整理により形状が明らかとなった冷水窯跡の型打ち製品以外の資料と，鹿児島（鶴丸）城本丸跡・二之丸跡出土の資料について紹介しておきたい。

【冷水窯跡】

25 は白薩摩の仏具である。報告書掲載番号 185 の資料であるが，接合により外面に呉須により「御影堂」と記されていることが判明した。底部には獣足が3か所つくものと思われる。胎土は白色でやや荒くぱさついた感じがあり，不純物もわずかではあるが含まれる。釉は明度の高い透明釉がかかり，細かい貫入が入る。

26 は茶釜の蓋で，ボタン状のつまみがついていたと思われるが，欠損している。上面に蛇蝎風の釉薬が掛かる。胎土は灰褐色を呈し，微細な黄白色の不純物を含む。

27 は茶釜である。報告書掲載番号 177 の資料であるが，再整理によりほぼ完形に復元することができた。胎土及び釉薬ともに 26 と同様であることから，セットになる可能性も考えられる。胴部中位に松笠を象った鐸付が対で付けられる。釉は外面胴部には釉が掛かるが，炉に接する底部は露胎する。

28 は瓢箪形の徳利で，頸部は細く締まり，口縁部は頸部から短く直線的に伸びる。灰色の胎土に透明釉がかかり，胎土は緻密であるが鉄分と思われる微粒子を含み，器面にも浮き出て観察される。

【鹿児島（鶴丸）城跡本丸跡・二之丸跡】

29 は，二之丸城跡出土より出土した茶道具の杓立である。接合・復元作業により完形に復元することができた。胎土は，不純物がほとんど見られず緻密である。灰色の素地に白象嵌による三島手の文様が描かれる。

30 は本丸跡出土の植木鉢である。報告書掲載番号 601 の資料であるが，二之丸跡の一般遺物と接合でき，形状もほぼ完形に復元できたことから再実測を行った。胎土は暗緑色を呈し，29 と比べるとやや粗い。外面には白象嵌による三島手の文様が描かれる。底面には中央に1か所とその円周に5か所，水抜き孔があげられる。

29・30 とも薩摩藩の窯である堅野系窯場の製品であるが，具体的な窯場は不明である。年代観については，18世紀後半以降のものと考えたいが，断定には至らない。

3 今後の課題

収蔵遺物保存活用化事業に伴い行われた冷水窯，鹿児島（鶴丸）城跡本丸跡・二之丸跡の再整理により，今日までの薩摩焼研究の中で詳細が不明であった藩窯冷水窯について，わずかではあるがその様相が見えてきたことは貴重な成果である。

今後，鹿児島（鶴丸）城跡の出土品は，分類した陶磁器の統計から，本丸と二之丸の組成を検討する必要がある。また，堅野系窯場は冷水窯の他にもいくつかの窯場があったことが分かっているため，今回の冷水窯跡出土の製品と比較しながらその特徴を詳細に観察する必要がある。

なお冷水窯跡については，おおよその開窯年代はわかっているものの，製品についての詳細な年代観等は未解明であるため，製品の主な供給先である鹿児島（鶴丸）城跡や江戸の薩摩藩上屋敷跡等の出土品の組成や供伴関係を綿密に調査する必要がある。また，幕末に京都に置かれ，現在同志社大学構内に所在する薩摩藩邸跡，贈答品や献上品を受け入れた將軍家や有力な幕臣の屋敷跡，薩摩藩と養子縁組もしくは婚姻関係にある大名家等の出土品や伝世品を調査するとともに，文献等も踏まえた総合的な調査を進めていく必要がある。

再整理の成果については，今後も少しずつではあるが報告を続け，どこかの機会に再整理報告書をまとめることができると考えている。

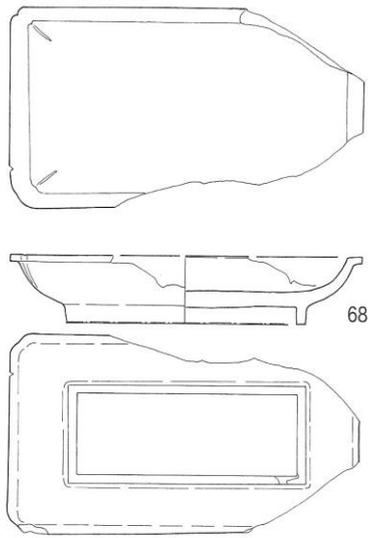
（文責 関 明恵）

【参考文献】

- 社団法人鹿児島県共済会南風病院 1978『堅野（冷水）窯址』南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（26）
- 1983『鹿児島（鶴丸）城本丸跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（55）
- 1991『鹿児島（鶴丸）二之丸城跡（遺構編）』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（60）
- 1992『鹿児島（鶴丸）城二之丸跡（遺物編）』
- 田沢金吾・小山富士夫 1941『薩摩焼の研究』東洋陶磁研究所
- 関明恵 2012 「堅野冷水窯跡出土遺物の追加報告―物原 I を中心に一」『研究紀要・年報縄文の森から』第 5 号
- 毎田佳奈子 2007 「薩摩藩江戸屋敷の“薩摩焼”（2）」『東京考古』第 25 号

遺物観察表(※実測分のみ)

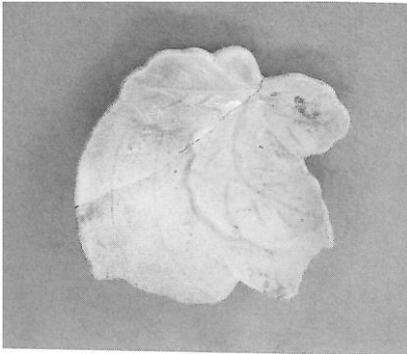
掲載 番号	遺跡名	出土区等	器種	胎土の 色調	釉薬	施釉部位	法量(cm)			備考
							口径	底径	器高	
1	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	12.2	7.6	3.3	
2	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	長辺 13.7	短辺 11.7	3.4	
3	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	13.2	6.7	3.2	
4	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	13.4	7.5	3.8	
5	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ南西	鉢	白色	透明釉	畳付以外施釉	16.3	7.0	4.9	
6	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ南西下	皿	白色	-	-	長径 16.6	短径 11.0	6.6	
7	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	長辺 14.6	7.2	3.3	短辺12.1
8	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ	皿	白色	透明釉	脚部以外施釉	12.9	-	4.1	
9	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	長型 14.9 短径 10.4	長径 7.2 短径 5.2	3.8	
10	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	脚部以外施釉	10.2	-	2.5	
11	堅野(冷水)窯跡	不明	皿	白色	透明釉	畳付以外施釉	7.0	-	2.1	
24	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ南西 南西下	酒器	灰褐色	-	-	5.6	5.6	5.7	最大径14.8
25	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅱ南西下	仏具	白色	透明釉	残存部全面施釉	20.4	-	-	
26	堅野(冷水)窯跡	不明	蓋	灰褐色	蛇蝎釉状	上面	12.0	底径 14.0	1.9	
27	堅野(冷水)窯跡	不明	茶釜	灰褐色	蛇蝎釉状	外面腰部まで施釉	13.7	腰部 24.0	17.3	
28	堅野(冷水)窯跡	物原Ⅰ 物原Ⅰ南西	德利	灰色	灰色がかった 透明釉	外面は畳付以外 施釉	2.9	11.2	20.2	
29	鹿児島城二之丸	-	杓立	灰色	透明釉	畳付以外施釉	5.4	5.8	19.0	
30	鹿児島城本丸 ・二之丸	-	植木鉢	暗緑色	透明釉	外底面以外施釉	81.2	54.9	54.5	



江戸薩摩藩上屋敷出土



冷水窯跡出土 (写真 12)

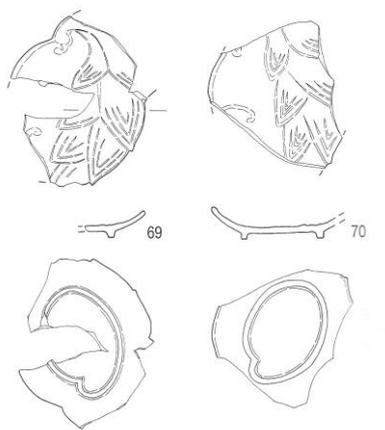


江戸薩摩藩上屋敷出土



冷水窯跡出土 (第 8 図 10)

~~~~~

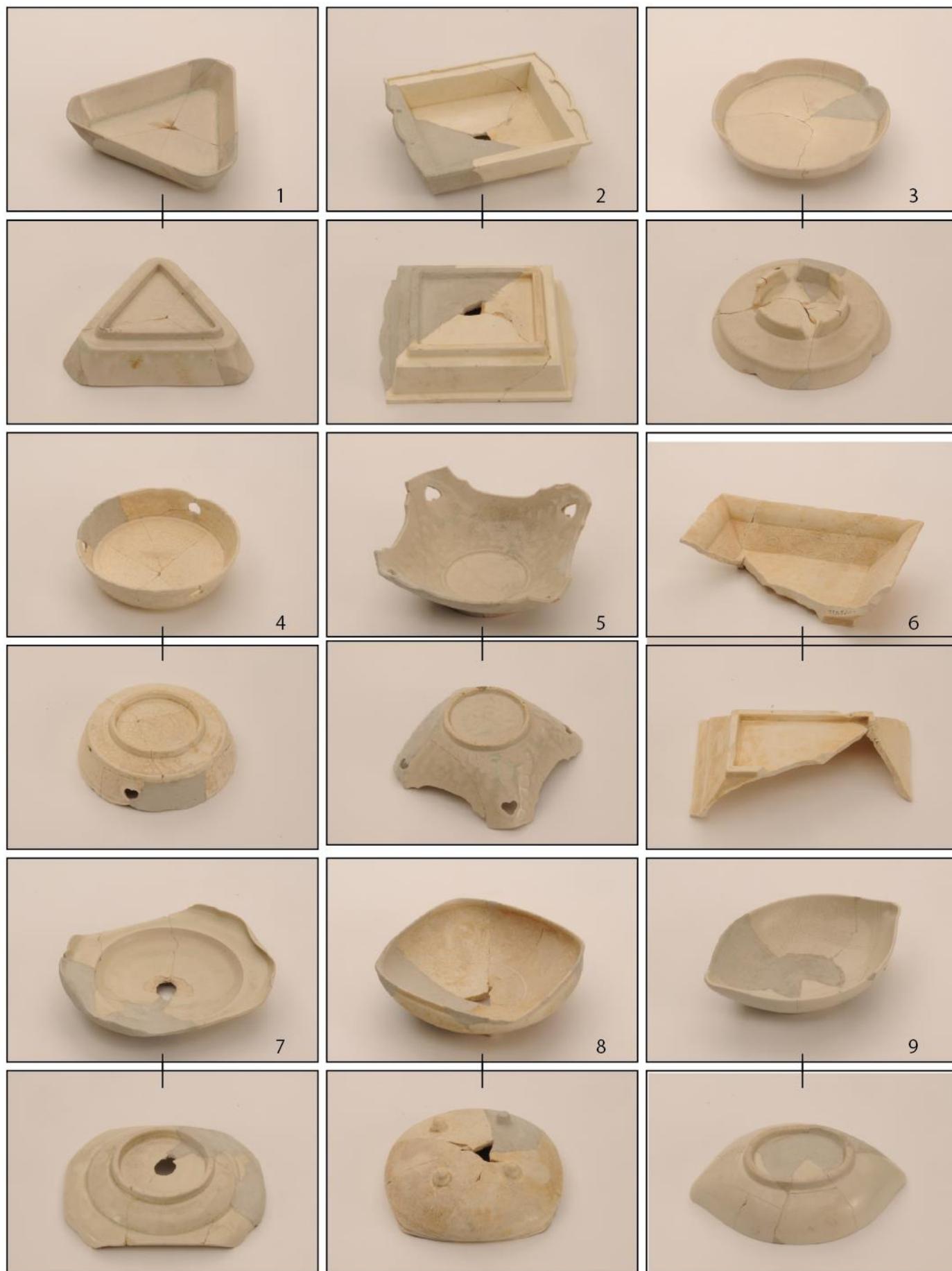


江戸薩摩藩上屋敷出土



冷水窯跡出土 (第 8 図 11)

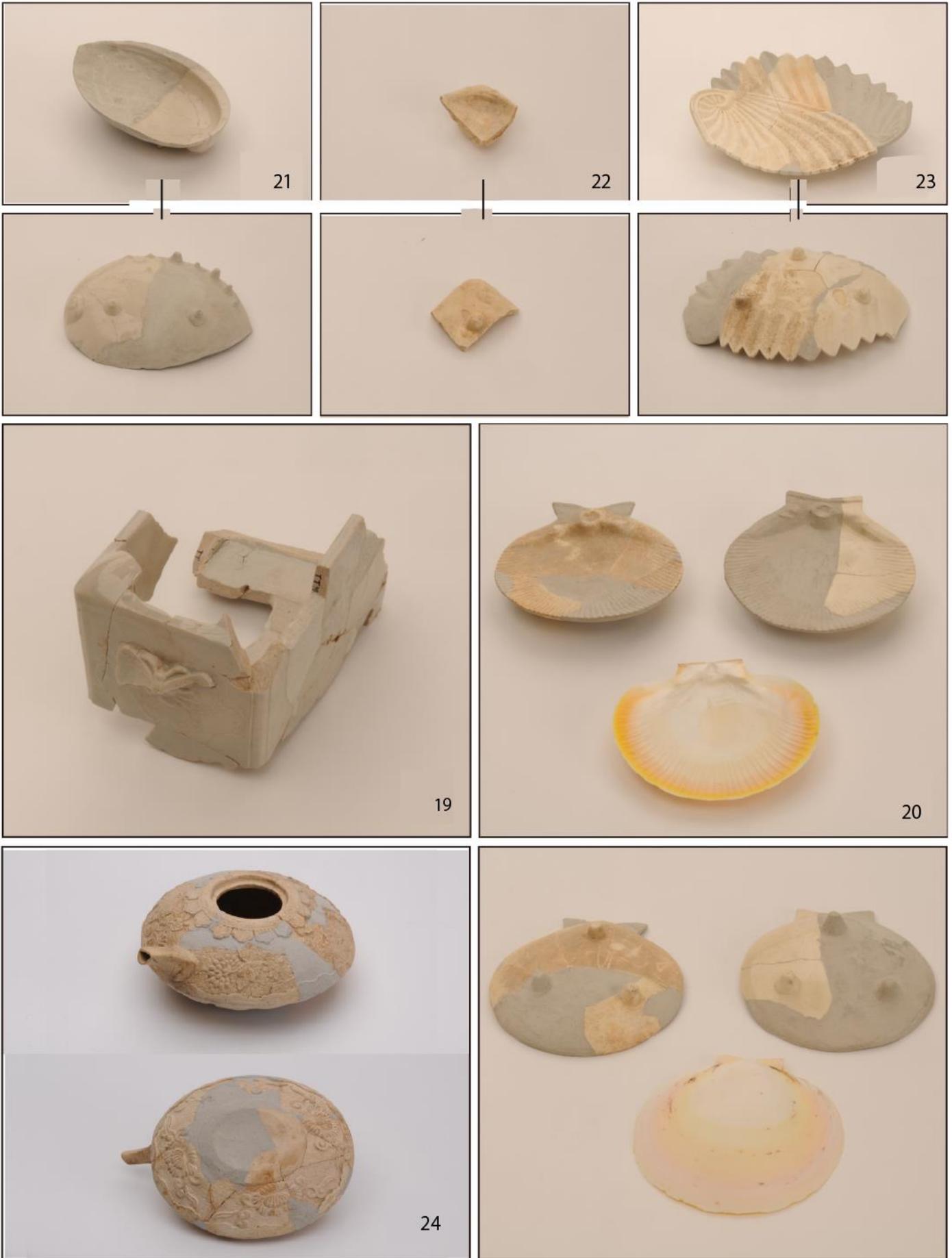
第 12 図 江戸出土品 (E 区 20 号 b 左) と冷水窯跡出土品 (右) の対比



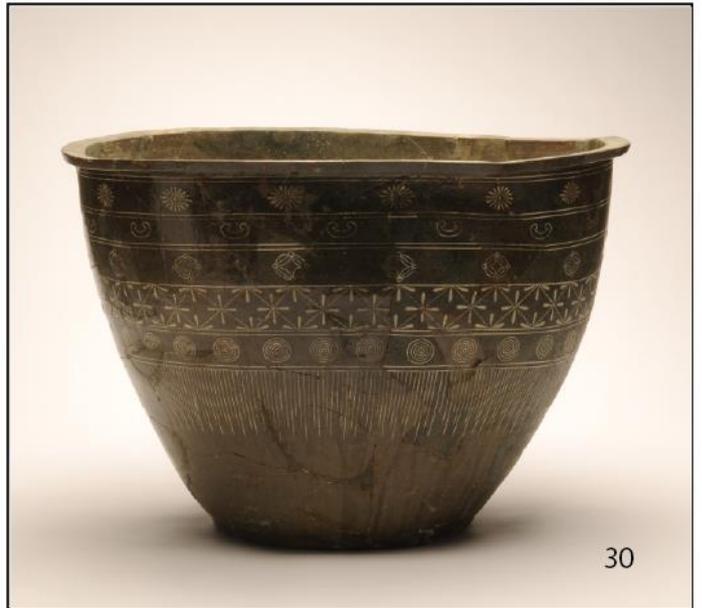
豎野（冷水）窯跡 型打ち製品 1



豎野（冷水）窯跡 型打ち製品 2



豎野（冷水）窯跡 型打ち製品 3



豎野（冷水）窯跡・鹿児島（鶴丸）城跡 出土遺物